

高山村久保遺跡群
小布毛遺跡
—上高井郡高山村小布毛遺跡発掘調査報告書—

目 次

序

- | | | |
|-----|-------|-----------|
| I | 調査の経過 |(1) |
| II | 遺 跡 |(3) |
| III | 遺構と遺物 |(6) |
| IV | おわりに |(12) |

1983

長野県北信土地改良事務所
上高井郡高山村教育委員会

序

昭和56年度から始まりました、長野県上高井郡高山村の、高井土地改良区県営ほ場整備事業のうちで、昭和57年度実施予定地区に、久保遺跡群が所在していることがわかり、急きよ、遺跡の保護措置が必要になりました。そのため、長野県教育委員会文化課、長野県北信土地改良事務所、高山村、高井土地改良区の各関係者と協議を重ねてまいりまして、遺跡の保護につきましては、ほ場整備事業に先立って発掘調査を実施し、記録に残すことになりました。本村におきましては、坪井遺跡や藤沢窯跡、あるいは、10数年継続している湯倉洞窟遺跡など、多くの学術発掘調査を実施してまいりましたが、このような開発に伴う緊急発掘調査は初めてのことです。

この発掘調査に伴う経費は、事業主体者である北信土地改良事務所が負担し、また、農家負担分にかかわるものについては、高山村教育委員会が国及び県の補助金を得て負担することになりました。したがって、これは二本立ての事業ということになりますが、発掘調査はすべて高山村教育委員会が主体になり、新たに編成しました久保遺跡発掘調査団に委託して、実施するはこびになりました。しかし、発掘調査の期日は、ほ場整備事業の関係から、夏休み前の農繁期にかかり、しかも梅雨期という、野外の発掘調査にとっては最悪の日程で実施せざるを得なくなり、開発と保護との調整のむずかしさを知らされました。幸い、発掘期間中は晴天に恵まれ、調査団の編成も、遠方から島田恵子・横山かよ子両調査員をお迎えすることができ、整えることができました。また、地元の小山義雄調査員のご尽力により、水中区民あげてのご協力があり、予定した発掘調査を無事完了することができました。これは、ひとえに関係者各位、ならびに発掘調査団の皆さん方のたまものであり、ここに、発掘調査報告書を刊行するにあたり、深く感謝の意を表する次第です。

昭和58年2月11日

上高井郡高山村教育委員会 教育長 西 原 正

I 調査の経過

発掘調査に先立って編成された久保遺跡発掘調査団は、次のとおりである。

[調査団]

調査担当者 関 孝一

調査員 島田恵子・小山義雄・松本小市・水橋喜市郎・横山かよ子

作業員 新井秀一・新井美弥子・小渕君子・小渕久雄・内山 晃・内山幸一・内山幸子・内山せつ江・内山徹男・内山友太・内山信行・内山盈夫・内山義計・小林貞枝・小林ふみ枝・小林義一・小山邦雄・小山さく・小山武男・小山辰雄・小山忠作・近藤尚義・柴田 審・柴田嘉藤・柴田忠雄・柴田とみい・柴田悠二郎・清水正至・高村庄五郎・樽沢吉之助・遠山豊圓・中村 登・梨本丈吉・原 竹男・藤沢貞雄・藤沢よしい・松本信義・毛利義二

事務局 宮崎今朝夫・黒岩 哲・込町佳子

発掘調査は昭和57年6月1日から6月14日の間に実施した。このうち、試掘確認作業に3日間、発掘作業に8日間、準備等に2日間を要した。その経過は日誌にみるとおりである。

[日 誌]

6月1日（火）晴 発掘調査区域の設定に先立ち、遺跡の範囲確認調査を行った。ほ場整備事業区域内の各水田を、1カ所ずつ小型バックホーで試掘していくという方法をとった。北側の久保地区から開始したが、今日は遺物等の検出がなかった。

6月2日（水）晴後曇 範囲確認調査を続行した。午後から水中地区に移り、比較的立地条件のよい小布毛地籍で、遺物と土層の落込みらしいものを確認した。

6月3日（木）雨 終日雨のため、発掘調査の器材等を準備した。

6月4日（金）晴 範囲確認調査を続行した。棚田のような傾斜地の水田を、順次下方へ試掘していく。末端部は沼地に近い湿田であった。事業区域内では遺物等の検出がなかったが、隣接の果樹園で、土師器片等が表面採集された。今日で範囲確認調査は終了した。

6月5日（土）晴 小布毛地籍の遺構確認を行った。確認された遺構は土壙1基と溝2本であった。溝は長大なものを「溝第1号」とし、北側の短かいのを「溝第2号」とした。

6月7日（月）晴後曇 小布毛地籍の表土はぎを行った後、南北32m、東西20mの範囲で、発掘区域を設定した。グリッドは南北を基軸に4m四方とし、北南の区画には「1～8」、西東の区画には「あ～お」を付した。明日から作業員も参加する予定である。

6月8日（火）晴 溝第1号の発掘から開始した。溝は上段で途切れた状態になっていた。

6月9日（水）晴 溝第1号の発掘を続行した。溝の中には砂礫の堆積がみられ、砥石、

土師器片・須恵器片の他に、縄文時代の遺物も出土した。

6月10日（木）晴 午前中で溝第1号の上段部分の発掘が終了した。午後から溝第2号の発掘に移った。溝第1号と同じく、かなり厚い砂礫の堆積が認められた。

6月11日（金）曇 溝第2号の発掘が終了した。溝第1号の下段部分と、土壌の発掘に着手した。土壌の発掘は短時間で終了した。

6月12日（土）晴 溝第1号の発掘に集中した。溝は下方の「あ・1」グリッドで西側に曲流していたため、急きよ、1グリッドを拡張した。しかし、その先は水田の段差があつて破壊されており、調査はここまでで打切った。この辺は湧水線の上限にあたり、絶え間なく湧水があり、溝の曲流部分はよどみになっていた。

6月13日（日）晴 今日で発掘がすべて終了した。夕刻から氷川区公会堂で発掘調査の報告会が催された。

6月14日（月）雨 発掘器材等の後片付と、遺物の洗浄及び注記を行った。

発掘調査の経過は以上のとおりである。出土遺物の実測や図版の作成等は、発掘調査終了後、島田と横山が各自自宅において隨時行った。また、発掘調査報告書の執筆は、I調査の経過（島田）、II遺跡（横山）、III遺構と遺物（島田）、IVおわりに（開）、のとおり分担したが、すべての文書は、編集ならびに原稿の校閲を行った間にあることを、予め明記しておきたい。

なお、すべての関係資料は、高山村教育委員会が保管している。



(写真1) 遺跡全景（北方を望む）

II 遺 跡

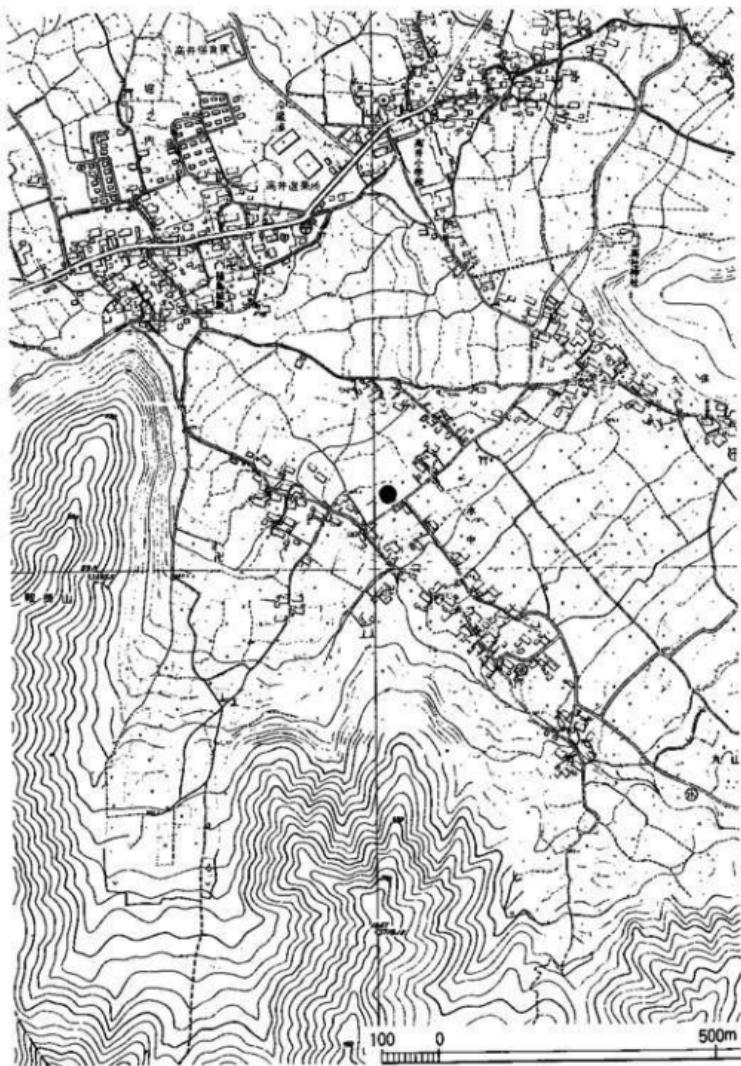
遺跡の立地 上高井郡高山村は善光寺平の東縁、松川扇状地の扇頂部に位置している。その東方は群馬県境の山岳地帯が連なり、各沢を集めた松川・樋沢川・八木沢川などの河川は、山間部をぬって、各々の谷口に小扇状地を形成している。高山村の遺跡はこうした谷口の扇状地に立地しているのが多く、久保遺跡群小布毛遺跡もその一つである。遺跡は、久保及び水中の両集落が所在する高山村の南部にあって、高山村大字高井字小布毛に所在する。この地域は、久保川と樋沢川による扇状地が形成されており、東南部には奈良山系、南西部には明覚山系の山々が延びて、三方がとり囲まれている。扇状地の末端にひろがる北西部のみは開析された状態になっており、遠く善光寺平の一部を望むことができる。しかし、ここも松川の押出しによって段丘状に一段高くなっているため、扇状地の末端はロート状に狭められ、水はけの悪い低湿地になっている。久保遺跡群はこの低湿地を囲む上段部分一帯にひろがるときれてきた。いいかえれば、標高480m付近に湧水線があって、今も豊富な湧水池が各所に点在しているが、これより下には水田、上には畠地がひらけ、久保遺跡群はこの中間を中心で発達したとされてきた。ところが、今回の遺跡範囲確定調査によれば、小布毛遺跡に限って造構等の検出があったもので、現在の水田地帯ではかなり限定された範囲にとどまるものといえよう。この地盤はかなりの急傾斜地に、上方から押出された土砂が堆積して、久保川と樋沢川との間に微高地を形成している。小布毛遺跡はこの微高地を利用して、湧水線を境に、標高480mから490mの間に立地しているといえる。



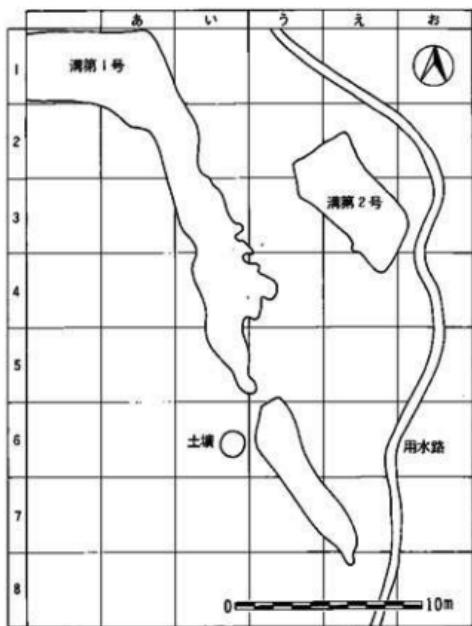
(写真2) 湧水池

歴史的環境 このような立地をみせる小布毛遺跡に立って、改めて周囲の歴史的な景観をみてみよう。

まず、東北部には、勝山を背景にした高社神社の社殿を望むことができる。高社神社は延喜式内社に対比してよく取沙汰されるが、その創立年代は詳らかでない。扇状地の上方斜面にあたる東南部に目を移すと、そこには丸山と称す残丘が



(第1図) 小布毛道路付近地図 (1 :10,000)



(第2図) 小布毛遺跡遺構実測図

あり、周辺に縄文時代の遺跡が所在している。小布毛遺跡で出土した縄文遺物は、おそらく、この辺の土砂の押出しとともに流下したものであろう。なお、山間部には積石塚らしいものや、五輪塔群が発見されている。続いて南部をみると、須坂市灰野に通ずる灰野峠や、中世山城の月生城がある。月生城では、昭和57年秋に、地元の高山中学生らが、珠洲焼系陶器や土師質土器片を発見している。西部に移ると、頁岩層の露頭する鞍掛山が扇状地末端部にせりだしており、ここではよく化石が採集されている。その山麓は久保川と樽沢川が八木沢川に合流する地点である。川の対岸にある堀之内地区の段丘状地形の上には、福島正則の居館跡が所在

しており、扇状地末端にみられる沼地状の低湿地は、恰好の要害になっていたと思われる。これらの歴史環境と、古代から中世に營まれた小布毛遺跡は、どのようなかかわりをもっていたのであろうか。今後に残された課題といえよう。

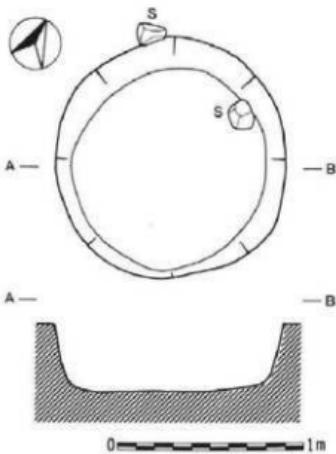
遺跡の状態 扇状地における一般的な土層状態をみると、涌水線を境にして、上段の畑作地帯では、第1層（黒褐色耕作土）、第2層（黒色粘質火山灰土）、基盤層（黄褐色粘土）となっている。基盤層には主として玲岩の角礫が一様の厚さではないが含まれている。それに対し、下段の水田地帯では、第2層と基盤層との間に、シルト層とよばれる低湿地特有の灰色粘土が堆積している。遺跡における層序も大体同じ傾向にあるが、検出された溝内には、茶褐色砂質土と黄灰褐色粘土の堆積がみられた。遺物は茶褐色砂質土に最も多く含まれ、黄灰褐色粘土はシルト層の灰色粘土と同類とみてよい。したがって、遺跡の土層は、第1層（黒褐色耕作土）、第2層（黒色粘質火山灰土）、第3層（茶褐色砂質土）、第4層（灰色粘土）、基盤層（黄褐色粘土）、に識別される。

III 遺構と遺物

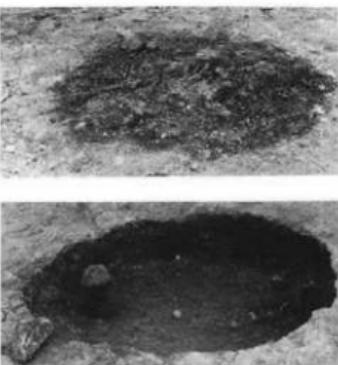
1 土 壤

遺 構 土壌は1基のみである。溝第1号の上段部分に隣接した、「い・6」グリッドから、出土した。基盤の黄褐色粘土層を、整った円形に掘り込み、その中に、上層の黒色粘質火山灰土がくっきり埋没していた。土壌の規模は、長軸で1.30m、短軸で1.25mあり、深さは地形が傾斜しているため、25cm~45cmあった。土壌壁は垂直に掘られ、しっかりした作りになっている。土壌内に埋没している黒色土を発掘した際も、土壌壁から剥げ落ちるよう分離した。このことから、土壌は比較的新しいものではないかとも思われる。しかし、土壌がいずれの層序から掘り込まれたのか把握できなかったため、隣接する溝との時代関係についても、不明といわざるをえない。また、土壌内からの出土遺物についても、ほとんど皆無に近く、時代判定の決め手に欠けている。ただ、土壌壁の北側近くに、15cm大の自然礫が1個、底辺より15cmほど上から出土した。この他にもう1個、土壌外の北西部入口に近い所から、15cm大の自然礫が出土した。礫が全く含まれない状態の中から、2個の礫石が出土した点について、人為的に埋没させたものとする意見もあったが、根拠に欠け、礫石を北枕の枕石にでも想定したのかもしれない。

遺 物 出土した遺物は、黒耀石剝片2点と、土師器小片の1点に限られている。いずれも土壌の上部で検出されたもので、土壌に伴う遺物というより、外から混入したものと考えた方が妥当である。



(第3図) 土壌実測図



(写真3) 土壌（上・発掘前 下・発掘後）

2 溝第1号

造構 溝第1号は扇状地の斜面に沿って、南東から北西の方向に流れ、さらに北へ方向を変えながら、「あ・1」グリッドで西方向へ90度に曲流している。その間、「う・6」グリッドでは、開田時の破壊をうけ、いったん途切れた状態になっている。それは溝の最上段「え・8」グリッドの場合も同じである。発掘された溝の長さは約35mあり、所によって、巾は1mから4m、深さは10cmから70cmを有している。上段部分ほど巾・深さとも狭くて浅い。溝に傾斜があるためであろう。黄褐色粘土層の基盤をえぐった溝の底には、第3層の茶褐色砂質土が堆積し、その上に第2層の黒色粘質火山灰土が埋没していた。



(第4図) 溝第1号上段部実測図



(第5図) 溝第1号下段部実測図

溝は下段部へいくにつれ、全体の傾斜はゆるくなり、同時に巾・深さとも大きくなる。ことに、曲流する部分はよどみとなり、「あ・1」及び「あ・2」グリッドでは顕著な状態がみられた。この部分では、第3層の下に第4層とする灰褐色粘土層が堆積している。この土質は、時として黄褐褐色あるいは灰色の場合もあるが、いずれも沈澱によるシルト層に属すもので、溝ではこのよどみの部分にだけ認められる。このことは、湧水線以下の低湿地にみられる土層状態と同じであり、事実、このよどみ部分は湧水線直下に位置している。

なお、第4層中には直徑40cmの大砾石が集中していた。玲岩が多く、安山岩が少し含まれている。玲岩は高山村の南部地域に分布し、おそらく、基盤層内の砾が溝の流れに押出され、曲流部分で沈澱したものであろう。

遺物 出土した遺物は、黒羅石剝片3点、打製石斧3点、中世遺物若干、土師器片36点、須恵器片11点、灰釉陶器片1点、砥石1点、及び自然遺物としてわにぐるみ10個、自然木



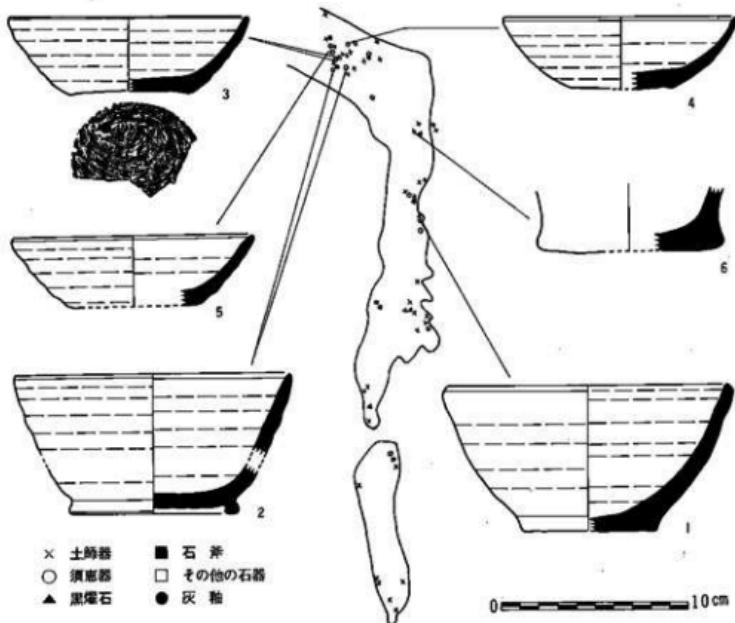
(写真4) 溝第1号よどみ部分の状態



(写真5) 溝第1号全景

一括であった。これらの遺物はすべて混在した状態で、第3層の茶褐色砂質土から出土しており、それも溝の下段部へいくにつれて出土数を増している。これは土砂とともに流された状態のものといえる。土師器片等に細片が多いのもそのためであり、器形をうかがうことができるのは、第6図に図示した須恵器の5点と土師器の1点にすぎない。

第6図1～5は須恵器、6は土師器であるが、1は器壁が厚く、指頭痕の多い环で、へら削りの底部は安定している。2は器壁が薄く、良好な整形で、低い高台を有する环である。3～5は砂粒を含むが整形は良好な环である。3・4の底部はやや上底の糸切りになっている。5も底部は欠けるが同類のものであろう。6は器形を示す唯一の土師器底部で、磨滅が著しい。底部には木葉痕がかすかに認められる。以上のうち、須恵器はいずれもロクロ整形が施され、器形的な特徴からすれば、平安時代頃に比定できると考えられる。それはまた、灰釉陶器片や、第7図1に示す砥石なども、同時期に比定されるであろう。砥石は、流紋岩の両面、左側面、下端部側面の4画を使っているものである。なお、おにぐるみや自然木は、よどみ部分から出土したものであるが、その出土状態からすれば、同時期、あるいは中世遺物が若干出土している

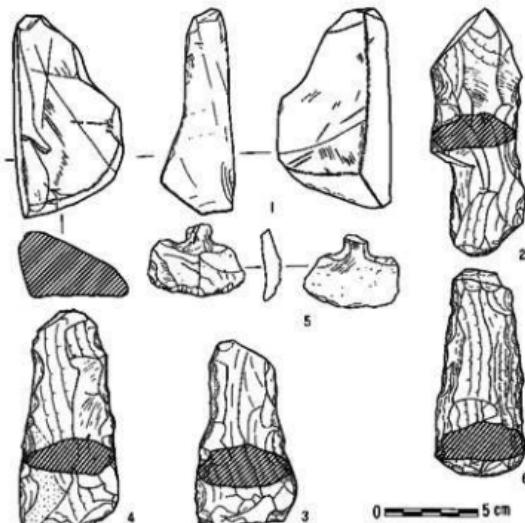


(第6図) 溝第1号遺物出土分布と須恵器・土師器実測図 (1～5 須恵器, 6 土師器)

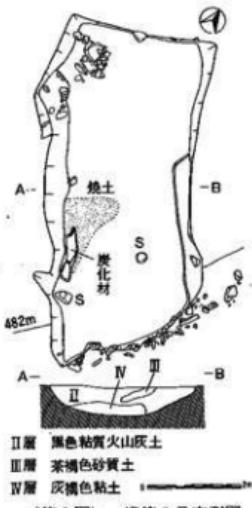
ことを考えれば、中世頃までの間としてよいであろう。いずれにしても、溝によって流され、再堆積した遺物であるため、層位的な検出による判定はむずかしいといわねばならない。しかし、溝第1号の出土遺物は、大勢においては、縄文時代は別として、その主体は平安時代の後半頃としてよいであろう。

3 溝第2号

遺構 溝第2号は発掘区域の東端、「う・2~3」「え・2~3」グリッドから検出され、溝第1号とほぼ平行している。発掘された長さは約7mにすぎない。溝の両端が、現在の用水路であるU字溝にはばまれて、これ以上の発掘が不可能であったためである。溝の南端に散乱している礫石は、U字溝を設置する際に埋められたもので、かなり破壊もうけている。溝の巾は3mから3.5mあり、深さは平均60cmになる。溝内の土層状態は溝第1号と大体同じである。基盤層を掘り込み、上半部分では、第3層の茶褐色砂質土の上に第2層の黒色粘質火山灰土が埋没している。それが下部分になるにつれて、第4層の灰褐色粘土が厚みを増すようになり、下方で約1mの厚さに達する。また、層中には40cm大の礫石が認められる。やはり、第4層は湧水線を境にして下方に分布している。なお、溝の南半部分に炭化材と焼土が集中して検出された。溝の底辺直上にあり、第4層と接し、第3層の堆積ではなく、第2層が直接埋没した状態になつてい



(第7図) 石器実測図 (1~4 溝第1号出土、5・6 溝第2号出土)



(第8図) 溝第2号実測図

た。これは何を意味するのか、はなはだ疑問であるが、溝第2号がなんらかの原因によって枯渴し、後世になって別の原因で火を燃した痕跡ではないかと考えている。

遺物 繩文時代の黒曜石剝片2点、チャート剝片1点、打製石斧1点、石匙1点、及び平安時代に相当すると思われる土師器片10点、須恵器片2点が、第3層から第4層上部にかけて、いずれも混在した状態で出土した。この状態は、溝第1号で述べたように、上方から押し流されて再堆積したことによる。また、出土した土師器片や須恵器片は、いずれも細片に限られており、図示することが不可能なものばかりであった。

4 繩文時代の石器

繩文時代の遺物について一括して述べておきたい。出土した遺物は黒曜石やチャートの剝片、打製石斧、石匙であるが、不思議にも繩文土器が発見されなかった。第7図2~4の打製石斧は溝第1号から、5の石匙と6の打製石斧は溝第2号から出土したものである。打製石斧の材質はいずれも変質玄武岩で、短冊形を呈すが、3は撲形に近い形態をとっている。石匙は横形の形態をとり、珪質粘板岩を材質に用いている。刃部はかなり銳利である。また、黒曜石製の石器はなかったが、黒曜石の剝片は意外に多く検出されている。これら繩文時代の石器は、前述のように、出土状態からみて扇状地上方から流されたものであることは明らかであり、それ



(写真6) 溝第2号全景

が丸山周辺の縄文遺跡に求められるのである。とすれば、時期的には縄文中期後半ないし後期前半頃にあたると考えられる。なお、石質鑑定には白倉盛男氏をわざらわした。御礼申しあげる次第である。

IV おわりに

今回の発掘調査はいわゆる耕作事業に伴う緊急発掘調査である。工事は夏期施行であり、事業の遅延は農家個人に迷惑が及ぶため、調査日程はかなり無理をした。このことは高山村に限らず、県内では市町村の調査体制の不備と相まって、調整に苦慮する点である。幸い、高山村教育委員会ならびに地元の水中区からは最大限の御配慮をいただき、調査団を代表して、冒頭に感謝の意を表する次第である。

さて、今回の調査をふりかえって、いくつかの成果を得ることができた。その一つは、事業地区内において遺跡の範囲確認調査を行ったことである。水田下の遺跡は範囲や内容に不明な点が多い。表面採集がしにくくことに起因しているからである。水田の場合、床土を掘抜いてしまうため、当該事業年度以外で試掘することはむずかしい。それでもほ場整備事業に伴う発掘だけは、必ず事前に確認調査を行うべきである。当然といえばそれまでだが、実際に遺跡全体を掌握しないまま発掘を実施し、多くのロスを生じた例もあり、遺跡を暗へ葬り去るようなことも起りかねない。発掘担当者の留意すべき点であろう。事実、今回の調査では、久保遺跡群に包括される小布毛遺跡の発掘区域を適切に設定することができたといえる。

次に、小布毛遺跡の立地についてみると、遺跡は久保川と樽沢川の扇状地上にあって、湧水線の付近に立地している。ことに遺跡が所在する所は、上方からの土砂の押出しにより、小高くなっている。土砂の崩落が原因しているのか、現在の久保及び水中の集落は、久保川や樽沢川に添って発達している。その地層についていえば、湧水線を境にして下方の水田地帯には、基盤層の上にシルト層の堆積がみられ、開田以前は一面に低湿地帯の様相をおびていたと思われる。それでは一体、このすり鉢状をなす扇状地の開発はいつ頃始まったのであろうか。このことは、この地域において稲作を基本にした歴史がいつ始まったかということと同じであり、高山村の南部地域の歴史を究明するうえで最も重要な問題といわなければならぬ。少なくとも地層からみた限りでは、第4層のシルト層の時期が水田開発の時期にあたり、その上に堆積する第3層の茶褐色砂質土層の時期は、上方からの土砂の押出しがさかんな頃であったと思われる。検出された溝がそれを物語っている。

溝は扇状地の傾斜にそって2本あり、用水路としての形跡が認められた。このような溝が他

に何本かあったのかもしれない。溝の構造は、溝第1号で確認されているとおり、湧水線直下でL字形に曲流させ、よどみ部分を作っているものである、その理由はいろいろ考えられるが、一つには湧水をためる湧水池の役割を有していたことであろう。あるいはまた、現在のU字溝用水路をみてもわかるように、激しい水流を各所において引水するためには、よどみ部分が必要であったともいえる。溝は基盤層を掘った人工のもので、溝第1号・2号とも同時期のものとみてよいであろう。そして、出土遺物は第3層の茶褐色砂質土層から出土し、その主体が平安時代末頃におかれている。ところが、前に述べたように、この第3層は流されて堆積した層で、出土遺物も再堆積の所産なのである。とすれば、出土遺物の時期が直ちに溝を築いた時期とすることはできない。層位的にみても、溝を築いた後にシルト層が堆積し、その後に遺物を混在する茶褐色土層が堆積し、やがて黒色土層が埋没して溝は廃弛されたと解せるからである。

したがって、溝出土の遺物は時期の決め手にならないが、推定としては平安時代後半頃、あるいは降って中世頃と考えている。というのは、遺跡においては日常生活の場である集落と、死後の世界である墓地と、生産活動の場である生産址の三領域が存在している。小布毛遺跡で農業遺構ともいるべき溝があり、生産址（水田）の一端とすれば、集落や墓域は他に存在している可能性がある。それは低湿地の生産領域に対し、それをとりまく畠地にひろがっていると予測される。想像するに、平安時代後半頃に、この扇状地に集落を営んだ入びとは、その下にひろがる低湿地に対し溝や畔をつくり、水田開発を進めていったが、たまたま土砂の流失にあって、上方の遺物が流れたとする考え方である。なお、溝以外に土壌が1基検出されている。土壌といえば大体土壤墓と結びつけて考える例が多い。小布毛遺跡においても土壤墓といいたいが、層位的に掘り込みが新しく、時期の決め手もなく、一概に断定しかねるものがある。後世における肥だめかもしない。いずれにしても低湿地をとりまく久保遺跡群の構成については、今後の調査研究にまづべき点が多い。

筆を下すにあたり、関係各位の御協力を心から感謝する次第である。



(写真7) 発掘スナップ

高山村久保遺跡群

小布毛遺跡 —上高井郡高山村小布毛遺跡発掘調査報告書—

発行日 昭和58年3月20日 編集 久保遺跡発掘調査団

発行 高山村教育委員会 〒382 長野県上高井郡高山村大字高井4972

印刷 ほおづき書籍株式会社 〒380 長野市中越293 柴崎ビル2F
